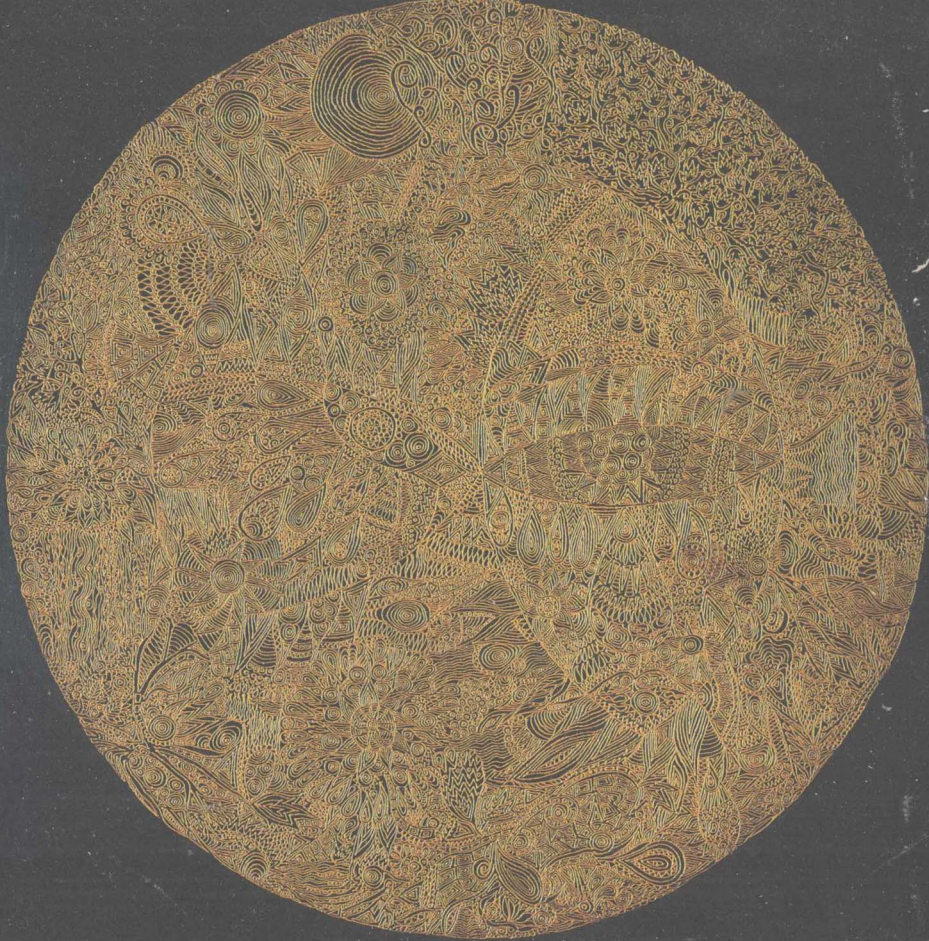
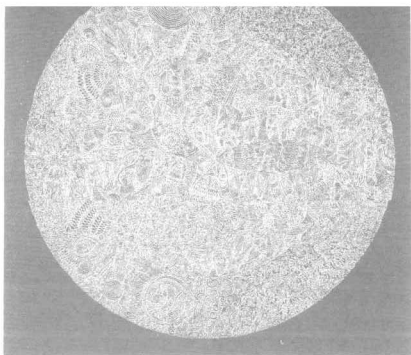




火の闇

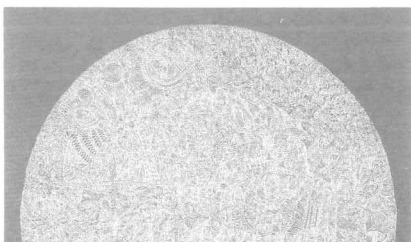
Kohama Kiyoshi

小 浜 清 志



火の闇

小浜清志



ひ やみ
火の闇

1995年2月10日 第1刷発行

著者
小浜清志
(こはま・きよし)

発行者
若菜正

発行所
株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話
03-3230-6100 (編集部)
3230-6393 (販売部)
3230-6080 (制作部)

印刷所
大日本印刷株式会社

製本所
文勇堂製本工業株式会社

定価はカバーおよび帯
に表示してあります。

著者との諒解により検
印は廃止いたします。

©1995 KIYOSHI KOHAMA
Printed in Japan
ISBN4-08-774116-8 C0093

乱丁・落丁の本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

光の群れ
5

祈る人
67

陽光
111

火の闇
173

装丁 水木奏
装画 邱世源

火の闇

光の群れ

海岸線に沿って群生するアダンの繁みを抜けるとすぐに砂浜にでた。まだ熱を含んでいる砂浜に尻を下ろし、ぼくはぼんやりと海を見ていた。遠浅の海に潮はなかった。二年前の台風で流れてきた大木の切り株が見えるほかは、石ころと小さな水たまりが点々と沖まで続いていた。切り株はちようど根を下ろすような格好で砂に埋まり、翳^{かげ}つてきた陽に細長い影を作っていた。真つ青な海はずつと遠くに押しやられ、向かいの小浜島の白い砂浜との間の、大きな水たまりにも見えた。どの水たまりも光っていた。切り株の影が長くなるにつれ、光の反射は淡くなった。

砂浜に手を差し込むと指先にひんやりとした砂の感触が伝わってきた。乾いた砂を掌ですくい指の間から細くこぼした。何本もの糸状に落ちる様を、妹の広美は白糸の滝だと言ってはしゃいだが、ぼくの住む由布島^{ユフジマ}の誰一人として本物の白糸の滝を見たことはなかった。

砂浜は静かだった。尻の位置をずらすと砂のきしむ音がした。遠くで山羊の甲高い鳴き声がする。ぼくは砂浜に寝そべり、青さを失っていく空に顔を向けていた。

入信した日から確かな違和感が膨らんでいた。友達の眼の隅にいつも探るような視線がひそんで

いた。とくに達男の眼の光には、陰険で差し込む強さがあつた。その理由は祖父が、達男の家の前にそびえている、島で一番大きくて丈夫な、いままでどんな台風にもびくともしなかったトーナチの樹に頭を下げなかつたばかりか、その無礼を諫めた達男の父に、樹が仏様になれるか、と嘲笑したからだつた。

達男の自慢は、台風が来てもトーナチの四方に広がる太い枝が風を遮るため、家屋は被害をほとんど受けないということだつた。

「おつとうはいつも言うんだ。この樹なら絶対に倒れないと信じて、樹の傍に家を建てたんだつてさ」

台風が来るたびに被害の状況を話し合っている級友の顔を順番に見たあと、達男は自分の父の先見の明を吹聴するのだつた。二年前の大型台風で島の大半が家を失つたというのに、達男の家は茅葺屋根を少し持つていかれただけの被害で済んだということで、クチブサ婆がトーナチの前に来ると手を合わせるようになった。

ウートオトウー。クチブサ婆は何遍かその言葉を繰り返して合掌し、深々と頭を下げるのだつた。クチブサ婆の始めたことは、瞬く間にひろがり、大抵の人は軽く頭を下げるだけであつたが、トーナチの樹は特別な関心を持たれるようになった。頭を下げる意味の分からない子供までが樹の周りでクチブサ婆と一緒にウートオトウーを唱和することもあつた。今ではトーナチの樹に異常がないかどうかを調べるのが達男の日課になっていた。

その樹を誹謗したという噂は、祖父への中傷へと発展していった。中傷の真意が何であるかは

はつきりしていた。すべては入信の日に萌芽し醗酵してきたことが、噴出したにすぎなかった。

ぼくは砂浜に寝そべり、運動場での出来事を思い出していた。遊びを誘ってきたのは秀伸だった。

「あれ、今日やろうよ」

小声で話しかけてきた秀伸にぼくは黙って頷いた。祖父のことがあって以来誰もがぼくを避けていたから、誘いは嬉しかった。秀伸の言うあれとは、アダンの繁みの中を歩き回る探検のことだった。滅多に人が踏みこまない繁みでは色々な発見があった。鳩の巣を見つけたことも野生の蜜柑の木を探したのもその繁みだった。入り組んだアダンの気根を縫い、細長い葉の周囲にびっしりとついている棘に気を配って進む探検は、ハブに出くわす危険もあったが、秘境を歩いている探検家の気分になれる愉しさがあった。

長袖に着替え待ち合わせた運動場に着くと、秀伸はすでに来ていて、砂埃すなぼろをあげながらドッジボールをしていた。探検は二人だけの秘密だった。ぼくはあえて秀伸の名を呼ばずに待っていた。何度か秀伸はぼくを見ただけでも遊びから抜け出そうとはしなかった。痺れを切らして大声をあげた。

「秀伸」

声は充分に届いているはずなのに振り向く気配すらない。もう一度呼ぶと達男が駆けてきた。口元に悪意が漂っていた。ぼくは達男を無視して秀伸の姿を追った。

「秀伸はよ、探検やめたって」

何も答えず、ぼくはその場を離れた。背後で達男の勝ち誇ったような声がした。

「探検はよ、もう飽きたってさ」

ぼくは秀伸が遊びの約束を破ったことも、二人の誓いを裏切ったことも許せなかった。

悔しい気持ちを振り払おうと立ちあがり、砂浜から水たまりへ向かった。足を浸すと生暖かい水がまとわりついた。

家に戻ると屋根のてっぺんにだけ夕陽があたっていた。庭の隅にはえているチヨーメイ草が甘ずっぱい匂いを放っていた。日中の強い陽差しで萎しぼれている細長い葉が、夕暮れになると生氣を取り戻し、匂いをだすのだった。鉛筆のように細長い葉をちぎると匂いは一段と強くなった。ぼくはチヨーメイ草を鼻にあてながら裏庭に回った。昨日やりかけた屋根の草むしりのつづきをするため梯子を登った。

屋根に登ると北から南へ芋虫状にのびる由布島の全景が眺望できた。周囲が二キロ、標高一メートルしかない島は隣接する西表島イオモテのヌスク岬と野崎岬に庇護される位置にあり、西表島とは反対に浮かぶ、どの島よりも小さく貧弱だった。西表島に背を向けて座ると、右頬に夕陽が当たった。眼下にさっきまでいた砂浜が見え、遠浅の海の右の方向に祖父と父が戦前まで住んでいたという黒島の島影があった。視線をわずかに左へずらすと手前から小浜島、竹富島タケトミそして最も遠い位置に石垣島が見えた。草むしりを忘れ、ぼくは長いこと海の向こうの島に見入っていた。

屋根から降りるともう一度チヨーメイ草をちぎって、誰もいない家を眺めた。

陽あたりのいい祖父の部屋が一番座でその隣りが二番座、その二つの部屋の前に長い縁側が走

っていた。一日中陽のあたる縁側の板目は建て直した当初はきちんと合っていたのに、二年もたつとちぐはぐになっていた。

ぼくは縁側の板の間で足についた砂をこすり落として一番座にあがった。畳にも生暖かさが残っていた。外から戻ったら必ず仏壇に手を合わせなさいと言われていたが、隣りの二番座にある仏壇へ行くことも億劫だった。

秀伸と一緒に深夜トーナチの樹を見に行つたことを思い出していた。深夜、トーナチがのびるため幹が動くと言いだしたのはクチブサ婆だった。

「オバ、眼がかすんで、そんな風に見間違えたんだろう」

ぼくたちが取り囲み、真偽を問い詰めると口をとがらせて言い返してきた。

「あらん、この目ではつきりと見たん」

「樹が何故動く！」

「あの樹は特別に生長が早いさ」

黻だらけのクチブサ婆のどこにそれだけの気力があるのかと思うほど、何を訊いても真剣な表情で捲し立てた。ぼくと秀伸はその夜、寝静まった家を抜け出して、トーナチの樹の真向かいにあるガジュマルの木の下で落ち合った。月があつても黒い影をおとす木の下に潜んでいると、誰にも見つかる心配はなかった。トーナチの影は特に大きく、根元は闇にとけて見えなかった。

秀伸が用意したおにぎりを食べると、あとはやることがなかった。ギンネム林の葉も雑草もてっぺんだけが露に濡れて光を放っていた。

ぼくたちはトーナチを黙って見続けた。クチブサ婆が言うには動くのは刹那であるという。瞬きをこらえようとするが目は勝手に動いた。

「今どうだった」

瞬きのあとに互いに尋ね合ったりしていたが、時間が経つと次第に無口になった。

月の光が降るように静寂も降っていた。秀伸がにじり寄ってきた。見たん、見たん、秀伸の声は囁れていた。ぼくも秀伸へ肩を押しつけ、トーナチを見ていた。確かに動いていた。トーナチの影が膨らんでいくのが見えた。クチブサ婆の言ったのとはまったく違い、自転車タイヤへ空気を送りこむような勢いとリズムで、影がひろがっていた。トーナチの枝だけがざわめいていた。影は着実にひろがり、ぼくたちの目前にまで近づいていた。秀伸がいつのまにか居なくなっていた。ぼくは膨れてくる影の中に得体の知れない怪物の荒い息遣いを聞いた。逃げようとするが足が動かなかった。隠れているガジュマルの影と、一段と濃くなってひろがるトーナチの影が重なった。けれども、闇の向こうから新たな闇が押し寄せていた。視界が闇に覆われ、目の前にかざす手が見えなかった。漆黒の闇で呼吸が苦しくなったとき、目が覚めた。

畳の上で目を見開いたまま、しばらく骨組を剥き出しにしている天井の梁を見ていた。生々しいトーナチの影の恐怖が消えなかった。胸に手を当てると動悸は夢の中と同じように鳴っていた。あの夜、ぼくたちはすぐに諦めて帰ったが、クチブサ婆の言うように本当は動くのではないかという疑問と不安が去来した。

夕暮れが訪れ庭の砂が黒ずんできたが、空には光が残っていた。夕闇は上から下へと降り積も

っていた。垣根代わりのユウナの木の間元は輪郭がくすんでいた。

両親と祖父が野良仕事から帰ってくる時刻だった。ぼくはランプの火屋ほやの掃除を三日間も怠けていたが、そのまま夢の恐怖を反芻していた。

広美の鼻歌が聞こえてきた。広美は縁側の反対の台所から入ってすぐに仏壇の前へ座ると鈴を叩いた。三回でいいと言われているのに鈴の音を愉しむように何回も叩いた。広美は鈴の音が好きだった。誰もいないと安心しているのか、小さく叩いたり大きく叩いたり鈴の音は止まなかった。

咳払いをすると、広美は鈴棒を手にしたまま、縁側を通って一番座へやってきた。

「ニイニ、いたの」

ぼくが黙っていると、広美が鈴棒を照れ隠しのように振った。音楽の先生が指揮するのを真似ているらしかったが、似ても似つかない仕草が可笑しくて口の端に笑みをつくると、広美が緊張を解いた。

「ニイニ、一緒に鈴の音を聞かない」

「罰が当たるよ」

広美は再び真顔になり、鈴棒を両手で握り、ぼくの傍に来て座った。

「罰って何？」

ぼくは説明の言葉を探しあぐねて、夢で見たトーナチの話をした。広美は話の途中でぼくの腕に抱きつき、言葉を止めると、生唾を飲みこんでその先を催促した。広美の掌はべとべとしてい

た。話しているうちに夢の恐怖が背中に貼りついてきた。罰とトーナチの影がどこかでつながっている気がした。

水牛車の音がした。ユウナは黒い固まりになり、その先は見えなかったが、水牛の荒い息と車輪の音が移動していた。広美は、鈴棒を持ったまま裸足で庭へ飛びだした。

ぼくはランプに灯を点ける支度を始めた。仏壇に置いてあるマツチを取り、ランプの下へ踏み台を置いて乗った。芯を調節してマツチの火を移すと、光はじわじわとひろがった。ランプ光は縁側の板目をわずかに浮かびあがらせ、庭の一部にまで達していた。光の届かない暗闇はランプの光と対峙するように、黒さを一層深くしているようだった。ぼくは踏み台に乗ったまま、庭の先の暗闇に懸命に焦点を合わせようとしていた。見えない所で何かが蠢いていた。正体を見つめるためにランプをかざして闇に突入したかった。しかし、どんなに追いかけても闇は無限に広がっている。ぼくは庭先の闇を見据えて踏み台を降りた。

「勤行すんど」

祖父は誰にもなく声を掛けると、仏壇の前に端座して題目を唱えた。背筋をきっちり伸ばし仏壇を凝視する横顔に威厳があった。ぼくが座すると祖父が題目をやめずに目で合図を送った。ぼくは櫛の葉を一枚口にくわえて、中腰の姿勢でローソクと線香に火をつけた。煙が天井へ揺れながら昇っていた。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……」

祖父と声を合わせて題目を唱えることは慣れていたが、勤行のたびに背後が気になった。

夕食の用意をする母を除いて全員が座ると、祖父が勤行の始まりの鈴を鳴らした。

入信の日からぼくの家だけが始めた新しい習慣だった。初めの頃、勤行の時間を見計らってわざわざ見物に来る村人もいた。最近では滅多にないことだったが、ぼくは背後の庭先の闇に人の気配を感じるのだった。経文を読めるのは祖父と父だけだった。途中から座った母もぼくも経文の文字を目で追うことが精一杯だった。広美はのっけから読むことを諦め、退屈そうに合掌の手をひろげたり身をよじったりしていた。最後の鈴が終わると、広美が真っ先に叫び声をあげた。

「しびれる、しびれる」

変色した足の裏を叩いている広美も首筋に汗をかいていた。祖父は額の汗を拭うと、正座のままうしろ向きになり、父に向かっていった。

「葬式には題目をあげたぶりよ」

「判ってぶん」

もう何度も口にする祖父の忠告に、父は迷惑そうに頷いた。

広美が心配そうに父へ問う。

「ジイジ、いつ死ぬんぬ」

「馬鹿」

ぼくがぶつ真似をすると、広美が足を引き摺って父の背に隠れた。

祖父は最近寝込むことが多くなっていた。寝込むたびに目の窪みが大きくなり頬の肉がおちていった。ランプの光線の具合で両眼が黒い穴に見えることがあった。ぼくは庭先の夜の闇に視線